

# 日本語の数量詞遊離——用例にみる機能的特性——

羽 鳥 百合子\*

## Quantifier Floating in Japanese — Factual Observations on its Functional Properties —

Yuriko HATORI

### Abstract

Numeral quantifier floating in Japanese is generally said to be restricted to the subject of intransitive verbs and the object of transitive verbs. Previous works, whether from a syntactic, semantic or functional point of view, have not succeeded in a full account of the properties of Japanese quantifier floating, because the factual evidence presented is not sufficient to support their claims. In particular, the case of a quantified argument preceded by some modifying phrase tends to be a counterexample to their proposals. Based on the analysis of the actual instances of floated quantifiers collected from some written texts, I will point out that the concept of “relative newness” should be taken into account: a floated quantifier must carry relatively newer information than its antecedent.

Key Words: quantifier floating, numeral quantifier, functional analysis, information structure, relative newness

### 1. はじめに

数量詞遊離と言われる現象は、様々な言語で観察されている。英語では、all, both, eachにそれが起こり、フランス語では tous がよく知られている。日本語では数詞数量詞の遊離が広範に見られる。

---

\*教授 言語学・英語学

- (1) a. All/both/each (of) the students attended the class.  
b. The students *all/both/each* attended the class.
- (2) a. Tous les enfants ont vu ce film.  
'All the children have seen this movie.'  
b. Les enfants ont *tous* vu ce film.  
'The children have all seen this movie.'
- (3) a. 講義が終わると、5人の学生がすぐに質問に来た。  
b. 講義が終わると、学生が5人すぐに質問に来た。  
c. 講義が終わると、学生がすぐに5人質問に来た。

(1b) (2b) (3b, c) の数量詞は、それぞれ先行詞の名詞句の外に出て、先行詞から離れた位置に生じている。このような現象は伝統的に「数量詞遊離」と呼ばれているが、必ずしもその生成過程が移動を含むことを意味するわけではない。本稿でもそれに従い、基底生成か移動かという問題には触れず「数量詞遊離」という用語を用い、遊離された数量詞を便宜上 FQ (= floated quantifier) と呼ぶことにする。

日本語の数量詞遊離については、数多くの研究があり、それぞれ興味深い指摘がなされているが、いずれの説もこの現象のすべてを説明し尽くしているとは言い難い。特に、各論文で示される例文の容認性についての判断が、必ずしも決定的だとは言えない場合も多い。比較的語順に自由度のある日本語では、語順を決定する要因が複合的であるために、数量詞遊離についての事実をかなり丁寧に吟味する必要がある。

本稿では、日本語の数量詞遊離について先行研究で問題になった点を整理しつつ、各研究で用いられている例文の問題点を指摘する。その後、実際にエッセイや小説から集めた FQ の用例を分析し、数量詞遊離が生じている文の実態を観察し、その本質を考え直すことにする。

## 2. 先行研究

FQ は、一般的には他動詞の目的語または自動詞の主語と関係づけられるものが圧倒的に多いとされ、例えば付加詞的な役割をもつ名詞句においては許されないという指摘がされている。このことを説明するために、様々な分析が提案されている。以下に代表的なものを取り上げる。

## 2.1. Miyagawa (1989)

Miyagawa (1989) は、FQ とその先行詞とは叙述 (predication) の関係にあるとし、これを完全に統語論の中で扱うことができるという立場で、次のような相互 c-統御制約を提案している。

- (4) Mutual C-Command Requirement: For a predicate to predicate of a NP, the NP or its trace and the predicate or its trace must c-command each other.

この制約によって、先行詞と数量詞は互いに c-統御しなければならないので、次のような事実が説明できるとする。

- (5) a. 学生が [本を 3冊 買った]。  
b. 学生が (今日) 4人 [本を買った]。  
c. ? \*学生が [本を 4人 買った]。  
d. \* [友だちの 車が] 3人 故障した。  
e. \*人が [小さい村から] 2つ 来た。  
f. \*学生達は [車で] 2台 来た。

(5 ab) では、下線部の名詞句と数量詞が互いに c-統御しているのでよい文になるが、(5 c-f) では c-統御していないため、いずれも容認できない文である。ここで注意すべき点は、Miyagawa は、助詞の「が」「を」「は」(及び「に」の一部の用法) はそれが付いても NP のままであるとするのに対し、付加詞的助詞の「で」「から」「へ」「と」などは後置詞として分析し、全体を PP としていることである。

Miyagawa の制約 (4) は、目指した方向性は評価されながらも、その後の研究ではこれに対する反例が多数提出された。以下に取り上げる研究は、いずれも Miyagawa (1989) への反例を前提にして提案されたものである。

## 2.2. 高見 (1998)

高見 (1998) は、多くの反例を挙げ、Miyagawa の統語論的な分析は不適當だと主張している。その一部を示す。

- (6) a. A : この新刊雑誌, 売れていますか?  
B : ええ, 今朝も 学生さんが [それを 5人 買って行きましたよ]。  
b. 学生が [レポートを 3人だけ 提出した]。  
c. 会社訪問で, [地元の企業に] 2つ 行ってきた。  
d. 僕は 元旦に [教え子から] 5人 年賀状を もらった。

上記の例文において, 下線部の名詞句と数量詞とは相互 c-統御関係にはないにも関わらず, これらはすべて容認できる文である。高見は, 次のような2つの機能論的制約を提案している。

- ① 文中のある名詞句が, その文の主題として機能することができる場合にのみ, その名詞句は数量詞遊離を許す。  
② 遊離数量詞は, 日本語の文の情報構造を遵守しなければならない。

日本語の文の情報構造では, 動詞が旧情報を表わす場合は, その直前の位置が文中の最も新しい情報が現れる位置となり, より重要な情報ほど動詞に近い位置に置かれる。また, かき混ぜ規則により文頭に移動した要素は, 有標焦点となり, 最も重要な情報を担うことになる。

高見の①に従えば, (6c, d) の後置詞句中の名詞句が FQ を許すのは, その名詞句が「は」による主題化ができるからであるという。対応する (7) は, しかるべき文脈の中に置けば, 確かに容認できる文である。<sup>1</sup>

- (7) a. 地元の企業は, 会社訪問で行った。  
b. 東京にいる教え子は, 元旦に年賀状をもらった。

また, 高見の②に従えば, 次の (8a) (9a) は日本語の文の情報構造を守っているので容認されるが, (8b) (9b) はそれに違反して容認されないということになる。

- (8) a. 生徒がこの階段で3人転んだ。  
b. ? \*生徒がこの階段で突然3人転んだ。  
(9) a. 1人しか, 田中先生が学生を褒めなかった。  
b. ? \*1人, 田中先生が学生を褒めた。

(8a) では、数量詞「3人」がこの文で最も重要な意味をもつという解釈が可能であるから、動詞の直前の位置に生ずることが情報構造上自然であるが、(8b) では、更に重要な要素である様態副詞「突然」が数量詞「3人」の前にくるために情報構造上不適格となる。また、(9a) では、限定の「しか」がつくことで、前置された数量詞が有標となり、容認されるのである。

高見の機能論的制約①は、Miyagawa が叙述関係 (predication) としてとらえようとした側面を、統語的ではなく機能的な観点から説明している。つまり、そうすることによって、付加詞的な後置詞句の中で数量詞遊離を許すものと許さないものがあるという事実が説明できると考えている。筆者の判断では、(6c) と (6d) との間には自然さに差があり、「から」は「に」に比べて数量詞遊離に対していささか無理を感じる。同様に、(7b) の主題化は多少不自然で、次のように「から」を挿入した方が容認しやすい。

(10) 東京にいる教え子からは、元旦に年賀状をもらった

このように数量詞遊離を許すかどうかということと主題化ができるかどうかということとの間に平行関係があるという観察は、基本的な直感としては正しいと思われる。しかし、先行詞と数量詞との間に主題—題述関係が成立するということと数量詞遊離現象が可能だということが本質的にどのように結びつくのか、高見の説明は必ずしも明確とは言えない。<sup>2</sup>むしろ、数量詞遊離と主題化とは直接の関係はないが、どちらの現象の背後にも、後置詞句の付加詞性の程度という共通の要因が関わっていると考えた方がいい。Miyagawa が NP か PP かというふうに統語的な線引きをしようとした現象に対して、「主題化のしやすさ」という「程度」の観点を入れたということが、その本質だと思われる。

### 2.3. 加藤 (2001)

加藤 (2001) は、他動詞の目的語と非対格自動詞の主語が同じようにふるまい、非能格動詞の主語とは異なる文法性を示すという Miyagawa の基本的な指摘は、何らかの形で捉えなければいけない一般化であり、高見は構造的な条件を一切考慮しないために、それが説明できていないという。加藤は、高見の制約では、例えば (11a) に比べ (12a) の方がはるかに悪いという事実は説明できないし、他方で、他動詞構文の (13a) と (13b) の間にほとんど差が感じられないという事実も説明できないと指摘する。高見の制約では、(11a) , (12a) , (13a) は様態副詞の「突然」や「ゲラゲラと」が FQ の前に来るために同じように悪くなるはずだからである。

- (11) a. (?) [生徒がこの階段で突然3人転んだ。  
b. [生徒がこの階段で3人突然転んだ。
- (12) a. \*子供が [その場面でゲラゲラと2人笑った。  
b. 子供がその場面で2人 [ゲラゲラと笑った。
- (13) a. 生徒が [教師をこの廊下で突然3人殴った。  
b. 生徒が [教師をこの廊下で3人突然殴った。

この問題を解決することを目指した加藤の提案は、次のようなものである。

- (14) 遊離数量詞は動詞を修飾するものであるので、まず動詞句副詞として解釈され、次の候補として文副詞として解釈される。

この提案に従うと、(11) と (13) では動詞句の内部で FQ が内項を修飾するという正しい解釈が得られるし、(12b) では、FQ が動詞句の外にあり、外項と正しく結びつく。しかし、(12a) では「ゲラゲラと」が動詞句の中の要素であることから、FQ「2人」と外項が結びつくことを阻止することになってしまう。\*がつくのはそのためだということになる。

しかしながら、この説明に対しては次のような疑問が生じる。果たして (11a) と (12a) の容認性の差はそのように本質的なものなのだろうか。確かに、上記の例文のままならば、筆者も容認性についてほぼ同じ判断をする。しかし、この種の文には多少なりとも居心地の悪さを感じられ、それは先行詞の名詞が修飾語句を伴わない裸のままであるということによる。後で示すように、実際の用例では、名詞句に何らかの修飾句がついている例が多数観察される。今、(11a) と (12a) に修飾句をつけると次のような文になり、これは元の文よりもはるかに落ち着きが良い。

- (11a)' 1年生と3年生の生徒がこの階段で突然3人転んだ。  
(12a)' 映画を見ていたアメリカ人の子供がその場面でゲラゲラと2人笑ったので、つられて日本人の他の子供も笑ってしまった。

もし、このような文が許されるとすれば、加藤の提案は強過ぎることになり、結局は統語構造以外の機能的な要因を考慮する必要があるであろう。

加藤は、更に、FQ は先行詞とではなく動詞の項と結びついて解釈されるという立場を取っ

ている。加藤によれば、FQがどのような助詞を取る項と結びついているかということは、動詞によって自ずと決まってくるのであり、先行詞の問題ではない。FQは、いわば常に助詞を省略した形で生ずるのであり、従って、FQに対して復元されるべき助詞は、省略可能な助詞でなければならないという。この考えの背後には、前節の終わりで指摘した後置詞句の付加詞性と重なる問題意識があると思われるが、加藤は、「数量詞の解釈は先行詞がなくても可能である」という強い主張をしている。例えば次の3つの例において、先行詞がなくても、数量詞はそれぞれ主語、目的語、場所句というふうに問題なく解釈されるという。

- (15) a. 3人死んだ。  
       b. 3人殺した。  
       c. 3つ行った。

しかし、上記(15c)を見た時、筆者は加藤とは異なった反応をし、(15c)に対して「何か動くものが3つ行った」という意味の解釈をした。例えば、子供がおもちゃの自動車で遊んでいて、3つ向こうへ走らせてしまったあとに言うことばとして、何の不自然さもない。「3つの場所に行った」という解釈ももちろん可能であり、いずれの意味を与えるかは文脈によって決まるのである。実際に数量詞が単独で出てくる用例を見ると、先行詞がないのではなく、いずれも先行詞が省略されていることが明らかな場合だけである。更に、次節で見るように、FQの先行詞を省略することができない例も多数ある。

以上、加藤説が前提にしている例文にもまた問題があり、その解釈に依存する主張は必ずしも説得力があるとは言えない。

#### 2.4. Ishii (1998)

Miyagawaが一般化してとらえようとした構造的制約は確かにありそうなのに、高見らが指摘するような反例の存在はどうしても認めざるを得ない。このジレンマを解決する方向として、Ishii (1998)はFQには2種類あるのだという主張をする。1つは、IshiiがNP数量詞と呼ぶもので、これは先行詞に必ず隣接して出てくる数量詞の場合で、Miyagawaの相互c-統御制約に従う。もう1つは、VP数量詞と呼ぶもので、これは先行詞から離れて生起することが可能であり、かき混ぜによって文頭に生起することもできる。後者の場合は先行詞と数量詞は相互にc-統御する必要はない。Ishiiは、この2つの数量詞の区別が意味的な相違に対応しているという。一方はdistributiveあるいはcumulativeと言われる読みであり、数量詞は出来事が複数

回起っていることを述べている。他方は、non-distributive と呼ばれる読みで、数量詞を含む単一の出来事を述べている。NP 数量詞はいずれの読みも可能であるが、VP 数量詞は non-distributive な読みを許さないというのが、Ishii の主張である。

- (16) a. ?囚人が 刑務所を 5人 脱走した  
 b. ?\*突然 囚人が 刑務所を 5人 脱走した  
 c. この2週間で 囚人が 刑務所を 5人 脱走した  
 d. 突然 囚人が 5人 刑務所を 脱走した  
 e. この2週間で 囚人が 5人 刑務所を 脱走した

(16a, b, c) は VP 数量詞の例であり、distributive な読みが与えられる。「突然」というそれに反する副詞が用いられているため、(16b) は許されない。「この2週間で」という副詞は、囚人の脱走が複数回起っている読みを可能にするので (16c) はよい文となる。(16d, e) は、先行詞と数量詞が隣接して1つの構成素をなしている NP 数量詞の例である。囚人が5人一度に脱走したという non-distributive な読みが可能であり、これが (16d) の場合である。NP 数量詞は distributive な読みも許すため、(16e) もよい例となる。

次の例でも、VP 数量詞が「今も」や「突然」との共起を許さないということで、(17b) (18b) の容認性の悪さが説明できる。

- (17) この雑誌人気ありますか？  
 a. ええ、今も そこで 学生さんが 5人 最新号を読んでいますよ。  
 b. \*ええ、今も そこで 学生さんが 最新号を 5人 読んでいますよ。  
 (18) a. 花子は 子供たちの爪を 3人 切った  
 b. \*突然 花子は 子供たちの爪を 3人 切った  
 c. 花子は これまでに 子供たちの爪を 3人 切った

Ishii は「突然」、「この2週間で」、「今も」、「これまでに」などの副詞を重要な手がかりとして用いているが、各々の例文がほんとうに決定的な証拠になるかどうかということについては、やはり疑問が残る。例えば次の (18b)' は、(18b) の先行詞にしかるべき修飾句をつけ加えた例であるが、容認度は比較的高くなる。



(18b)' 突然 花子は けんかに加わった子供たちの爪を 3人 切った

この例がそれほど悪くないのは、数量詞の遊離に後述するような動機が与えられているからであり、意味が non-distributive であっても構わない。

また、Ishii が非文としている次の (19) も、少し変えれば容認度に差が出る。

(19) \*突然 2つ 太郎が 窓を 開けた

(19)' 突然 2つも 太郎が 窓を 開けた

(18b)' も (19)' も、先行詞と数量詞が離れている（即ち Ishii の VP 数量詞である）にも関わらず、non-distributive な読みが許されるということになる。

## 2.5. まとめ

Miyagawa (1989) の純粹に統語論的なアプローチは、数量詞遊離についてそれまでに観察された事実を理論化しようとしたという点で、評価されたが、その限界もきわめて明白であったため、それ以後の研究に大きな刺激を与えた。問題は、その制約が強過ぎることである。数量詞遊離のような語順に関わる問題は、どうしても意味的、機能的な面を考慮することなしにはすまない。

高見 (1998) の指摘と提案は、その意味では、きわめて妥当な方向を示していると言える。高見 (1998) を批判して、加藤 (2001) が示した例文も、結局は文脈に依存していることがわかり、加藤の説そのものはそれ程説得力があるとは言えない。Ishii (1998) の提案は、distributive な読みと non-distributive な読みの区別という数量詞における本質的な問題を考慮したという点で評価されるが、それが数量詞の構造的な位置ときちんと相関しているかどうかについては、少なくとも挙げられている例文において十分に示すことができているとは言えない。筆者が加藤や Ishii に対して示した例文 (11a)', (12a)', (18b)' は、いずれも先行詞に比較的長い修飾句がついている。実際に用例を集めてみると、このような状況で数量詞遊離が起っているものがかなり観察される。次節では、筆者が集めた 100 の用例の中で、数量詞遊離が実際にどのような傾向を示しているのかを調べ、それを踏まえて数量詞遊離の分析がとるべき方向性を述べることにする。

### 3. 用例に見る遊離数量詞の分布と特徴

#### 3.1. 問題

前節で取り上げた先行研究を含め、これまでに問われてきた数量詞遊離についての問題を次に挙げる。

- [1] 数量詞遊離は、基本的にどのような動機づけによってなされるのか。即ち、名詞句の外に数量詞が現れる構造はどのような意味と結びついているのか。
- [2] 数量詞遊離を許す動詞にはどのような性質があるか。
- [3] 数量詞遊離と結びつく名詞句（＝先行詞）にはどのような性質があるか。
- [4] 先行詞と数量詞との関係はどのようなものか。
- [5] 先行詞をもたずに単独であられる数量詞をどのように位置づけるべきか。
- [6] 数量詞は先行詞からどこまで離れて生起することが可能か。その時の条件は何か。
  - (i) 先行詞と数量詞との間にどのような要素が介在できるか。
  - (ii) 数量詞が前置されるとき条件は何か。

このような問題意識に基づき、実際の用例の分析を以下に示す。

#### 3.2. 用例の分析

100 の用例の大部分は、向田邦子のエッセイ『眠る盃』と『父の詫び状』から取ったものである。それ以外は、堀江敏幸の小説『熊の敷石』と立花隆の『ぼくはこんな本を読んできた』からである。以下、例文には著者名のみを記す。

100 の用例を先行詞の文法機能によって分けると、次のような結果になる。

自動詞の主語	44
他動詞の主語	0
他動詞の目的語	55
後置詞句	1 (「に」句)

この数字は、従来から「数量詞遊離は自動詞の主語と他動詞の目的語に起りやすい」と言われてきたことを、ほとんど完全に実証している。唯一の例外である「に」句と結びついている FQ の例は以下のものであり、この「に」句は、動詞「詰める」の項として機能している。

- (20) 毎年八月頃に実を採集し、二、三年ねかせて発酵した原液を四斗樽に五十～七十本ぐらい詰め、砂糖（白ザラ）を加えて濃度三十度の天然果汁を羅南で製造販売していました。（向田）

他動詞の主語が全く含まれていないのは、100例という用例数が小さすぎるということもあるかもしれないが、数量詞遊離が他動詞の主語ではきわめて生じにくいという事実は、あらためて確認しておく必要がある。<sup>3</sup>

次に、FQと共起する自動詞を意味的観点から分析してみると、すべてが何らかの意味で「存在」及び「出現」と結びつく意味をもつ動詞であることがわかる。存在を表わす構文は、[A] <～が 数量 ある／いる> という形式か、場所句を伴った [B] <～が 数量 ～にある／いる> というどちらかの形式で出てくる。出現の動詞は、圧倒的に「くる」を伴ったものが多い。出現の反対の意味をもつ消滅の動詞もここに含める。以下に、具体的な動詞と実例の一部を示す。

(21) 存在

[A] ある、いる、ない、生まれていない、残っていない、他（14例）

[B] ある、いる、並んでいる、すわっている、載っている、寝ている、  
残ってしまった、入っている、さしてある、転がっている、他（23例）

(22) 出現

滑り落ちてきた、来る、近寄ってくる、落ちてきた、やってきた、  
応募してくれる、欠けてゆく（7例）

- (23) 東京美術倶楽部の歳末売立では毎年覗いているのだが、出掛ける前に必ずすることが三つある。（向田）

- (24) …後先を考えずに私も反対車線へ走ってあとを追ってみると、そこは広大な麦畑の一角で、高さ二メートルほどの錆びついた給水タンクが三つならんでおり、（堀江）

- (25) 反対側から水兵さんが二人やってきた。（向田）

三原（1998）は、数量詞遊離を許す動詞のアスペクト的な意味特性に注目し、「結果の含意」がある動詞に限られるとしている。自動詞としては、非対格動詞である状態変化動詞、位置変化動詞、消滅動詞としてそれぞれ「枯れた」「届いた」「見えなくなった」の例文を挙げている。このような動詞も、より一般的に存在または出現の動詞とみなすことができる。

存在動詞と出現動詞の構文は、多くの場合新情報の導入に用いられると言われる。実際、44例のうちFQが先行詞をもたないもの（即ち先行詞は明らかに旧情報であるもの）が2例、先行詞が「は」によって主題化されているものが10例含まれていたが、その他の32例は、すべて先行詞そのものが新情報である。先行詞が「は」によって主題化されているもののほとんどは、上記[A]型の構文である。先行詞そのものが新情報だとすれば、このような場合に先行詞を省略することは当然許されない。例えば、(23)や(25)の先行詞を省いて(23)'や(25)'のようにするとおかしい文になるか、情報の不完全な文になってしまう。

(23)' \*東京美術倶楽部の歳末売立ては毎年覗いているのだが、三つある。

(25)' ? 反対側から二人やってきた。

先行詞の主語と数量詞との間に他の要素が介在している例は、以下の4例のみであり、主語と数量詞の隣接性が守られているケースが圧倒的に多数である。

(26) 手紙は一日に二通くこともあり、一学期の別居期間にかなりの数になった。(向田)

(27) …気に入っていた紅茶茶碗が前の引越しで一個、今度の転任でまた一個欠けてゆくのを見るのが悲しかった。(向田)

(28) 私のリンゴ箱も、こわれて廃棄処分にしたものが多くなり、一方、補充もきかないので、いまでは三〇箱くらいしか残っていない。(立花)

(29) 読んでいるのは日本でも数人しかいないという、そういう論文もあるんでしょうね。(立花)

これらの例に共通するのは、波線で示されている付加詞的要素が何らかの意味でFQを限定する機能をもっているという点である。また、(26)(28)(29)では、先行詞はいずれも「は」または「も」で導かれる主題である。

次に、FQの先行詞が「を」格の目的語の場合を見る。主語と結びつくFQが、ある特定の意味をもった動詞に限られているのに対して、目的語とFQが結びついている例では、動詞は多種多様である。以下、用例に出てきた他動詞を列挙する。

(30) 作る、聞こえる、忘れる、譲ってくれる、積み上げる、読む、頼む、食べる、持つ

ている、用意する、飲む、書く、むく、揃える、押し込む、運び出す、入れる、注文する、やらせる、狙う、貰う、のせる、買う、手に入れる、落とす、くれる、めくる、選ぶ、見る、動かす、誘う、求める、使う、付ける、外す

三原 (1998) は、このような他動詞にもアスペクトの観点から「結果」が含意されるとして、これを動詞の語彙的意味構造において捉えようとしている。しかし、数量詞遊離を許すすべての動詞の構文を統一的に扱うには、いくつかの異なった前提が必要であり、本論文ではそのことには立ち入らない。

遊離数量詞と結びついている目的語が旧情報と見なされる例は 17 例あり、そのうち先行詞がない例が 9 例あり、これは主語の場合より多い。しかし、いずれの場合も、先行詞は直前の文脈から明らかである。

(31) 父はおびただしい葉書に几帳面な筆で自分宛の宛名を書いた。「元気な日はマルを書いて、毎日一枚ずつポストに入れなさい」(向田)

(32) 私はよく沢山のアシスタントを使っていると誤解されるのだが、実際には、1人しか使っていない。(立花)

先行詞の目的語と FQ は隣接している例がほとんどであり、これに従わないものは、主語の場合と同様、FQ が前置されているか、FQ を何らかの意味で限定する要素が介在している場合である。後者の例は、次の 2 例であった。

(33) 早く大人になって、アイスクリームを一度に二つ食べてみたい、と思っていた。(向田)

(34) ピカソの絵とモネの絵をそれぞれ 10 枚ずつ選んで、ハトに見せてやる。(立花)

FQ が先行詞より前の位置に出ている例は、目的語に関しては 6 例、主語に関しては 3 例あり、そのすべてに何らかの取り立て詞あるいは限定詞がついている。これは、高見の②の制約が予測している通りであり、前置された FQ は有標焦点としての形式をそなえている必要があるからである。

(35) 夏は洋服だけで過ごしてきた私がたった一枚、夏の着物をつくったことがあった。

(向田)

(36) その頃は、会社の机の上に、常時二十冊くらい本を積み上げていたと思います。(立花)

(37) ところがただひとり、私の見る限りではただひとり、そんな光景には目もくれず歩いてゆく人がいた。(向田)

筆者の集めた100の用例を見るかぎりでは、目的語を先行詞とする遊離数量詞は全般的に「ずつ」「しか」「も」「は」「だけ」のような取り立て詞や「たった」「どれか」「ほんの」のような限定詞がつくものも多く、55例中25例あった。また、「2つ3つ」「2, 3台」「ぐらい」「ほど」などの形式をもつ概数表現が13例あり、合わせると38例(69%)にもなる。主語を先行詞とするFQの場合は18例(41%)であり、何らかの限定を受けたFQが目的語と結びついている場合に特に多いのには、何か理由があるのだろうか。同様のことは、(20)で示したたった1例の「に」句の場合においても、また度々引用される井上(1978)の例(39)においても観察される。

(38) …二、三年ねかせて発酵した原液を四斗樽に五十～七十本くらい詰め、

(39) 私は団体客を泊める宿屋に2, 3軒あたってみた。

井上の例では、更に、先行詞の「宿屋」に修飾句「団体客を泊める」がついていることにも注目する必要がある。このような長めの修飾句がついている先行詞は自動詞の主語の場合が15例(34%)、他動詞の目的語の場合が11例(20%)あり、自動詞の方が生起の割合は多い。これらの多くが[B]型の構文に起っている。

(40) そこは広大な麦畑の一角で、高さ二メートルほどの錆びついた給水タンクが三つならんでおり、…(堀江)

(41) 私はゆったりしたナイロン地のガウンを二、三枚用意しておいて、お好きなを選んで羽織っていただいている。(向田)

### 3.3. まとめ

本節では、100の用例の観察に基づいて次のような指摘をした。第一に、数量詞遊離を許すのは1例を除いて、自動詞の主語と他動詞の目的語であり、自動詞はすべて何らかの意味で存

在と出現を意味するものであった。第二に、FQは先行詞の後ろに隣接して出てくる例が圧倒的に多く、そうでない場合には、介在する要素がFQを限定するような副詞的要素であるか、FQが前置される場合であった。第三に、FQに何らかの限定表現がつくか、数量詞が概数表現になる例が非常に多く、特に目的語を先行詞とする場合には70%近くがその特徴をもつ。また、前置されたFQは、例外なく、限定表現がつくか、概数表現になるかしていた。第四に、比較的長めの修飾語句が先行詞につく例が全体の25%ほどあり、特に自動詞の[B]型構文にその傾向が強い。第五に、先行詞が主題を表わしていたり、直接結びつくべき先行詞が省略されている文即ち旧情報と結びつく遊離数量詞は、目的語の方がやや多く、主語の場合は[A]型構文に多く見られた。

#### 4. 数量詞遊離の機能

前節のまとめを受けて、FQが生起する最も基本的な位置を次のいずれかであるとする。

- (42) a. Subj FQ V(*aru/iru/kuru*) [A]  
 b. Loc Subj FQ V(*aru/iru/kuru*) [B]  
 c. Subj Obj FQ V [T]

いずれの場合も、FQは動詞の直前の位置すなわち新情報の位置を占める。FQは常に不定表現であり、FQそのものが既知の情報を表わすことはない。この点で、FQは、先行詞の直前に現れる修飾型の数量詞(43a, d)とは大きく異なる。

- (43) a. 2人の子供は若い父親に甘えている。  
 b. ??子供は2人若い父親に甘えている。  
 c. 子供が2人若い父親に甘えている。  
 d. 2人の子供が若い父親に甘えている。

(43a)では特定の2人の子供を指すのに対して、(43b)を同じように用いることはできない。(43c)では、明らかに「子供」も「2人」も新しい情報である。同じことは(43d)で述べることもできるが、(43c)では、子供が2人いるという存在の意味がより強く感じられる。<sup>4</sup> 数詞数量詞が意味的に「存在」と結びつくことは、数という概念の性質上自然なことであるが、

FQは、先行詞との相対的な関係において更に焦点としての性格が強いといえる。次の2つの疑問文のうち、FQ型の(44a)の方が自然に発せられる可能性が高いということも、同じ理由からである。

- (44) a. 子供が何人来ているか。
- b. 何人の子供が来ているか。

このような先行詞とFQとの情報構造上の関係に注目して、数量詞が遊離している文では(45)のような特徴があるということを指摘する。

- (45) 遊離数量詞(FQ)は先行詞よりも新情報性が高い

これは、高見の機能論的制約②の当然の帰結だが、特に先行詞との相対的な関係の中でFQの新情報性をとらえている点が重要である。

この観点から、前節で指摘したことを考察してみよう。上で述べたように、数量詞遊離構文においてFQが結びつく先行詞は、それ自体が新情報であるものが多い。それより新しい情報性を保ちながら先行詞との連結関係を維持するためには、FQは先行詞の直後に置かれることが重要である。先行詞とFQとの間に他の要素が介在した場合に、それが重要な情報をもつと、先行詞とFQとの情報関係がほけてしまうことになる。高見は、次の文の容認性が低いのは「ゲラゲラと」という様態の副詞が重要度が高いからだとしている。

- (46) \*子供がゲラゲラと2人笑った

この高見の指摘は、それ自体は正しいのだが、先行詞の情報量を問題にしていない点に限界がある。従って、2.3節で筆者があげた次の例文がなぜよくなるのかが説明できない。

- (47) 映画を見ていたアメリカ人の子供がその場面でゲラゲラと2人笑ったので、つられて日本人の他の子供も笑ってしまった。

この例文では、先行詞の「子供」に「映画を見ていたアメリカ人の」という長い修飾句がつくために先行詞が大きな情報量をもっている。(45)によりFQはこの先行詞より新情報性が高



いことになり、介在する他の要素は相対的に焦点性が弱くなる。FQは形式は単純でも、この位置に生起することによって十分に焦点としての機能を果たしていることになる。これに対して(46)では、「ゲラゲラと」の情報量に比して先行詞の「子供」の情報量が小さく、相対的に「2人」の焦点性がほけてしまうのである。

実際の100用例中で、主語の先行詞とFQとの間に介在している要素を見ると、(26)～(29)及び(33)(34)で示したように、介在する要素は、むしろFQの意味を限定し、強めるはたらきをしている。このことは(45)によってきわめて自然に説明できる。

すでに見たように、特に介在する要素がなくても、FQの先行詞には比較的長めの修飾句がつきやすいようである。長い修飾句を伴った名詞の直前に数量詞が出てきても、数量詞の意味はきわめて弱いものとしてしか感じられない。従って、このような状況では、数量詞は遊離せざるをえないとも言うことができる。(48)と(48)'を比べてみると、この違いは明らかである。

(48) そこは広大な麦畑の一角で、高さ二メートルほどの錆びついた給水タンクが三つならんでおり、…(堀江)

(48)' そこは広大な麦畑の一角で、高さ二メートルほどの錆びついた三つの給水タンクがならんでおり

また、実際の用例の中で、FQに取り立て詞や限定表現がついたり、FQが概数表現になるものがかなりの割合で出てくることも同じ動機づけによる。概数表現は、意味的にはあいまいであっても、不定性が強く、新情報性が高いと考えられる。主語や目的語以外の「に」句のようなものを先行詞にする有標性の高い構文の場合には、上述のような修飾句をつけるかFQそのものの新情報性を高めるかのいずれかの(あるいは両方の)方法で、先行詞とFQとの関係(45)を維持する必要がある。先に挙げた(49)(=39)は、それをよく示す例文である。

(49) 私は団体客を泊める宿屋に2,3軒あたってみた。

FQが先行詞の前に出てくる有標の構文においても、同様に、FQは新情報性が大きいことを示す形式的特徴をもっていなければならない。Miyagawa, 高見, Ishiiなどの先行研究の多くは、(50)に類する例文を出しているが、前節の観察により、実際に前置されるFQはもっと有標の形式をしていることがわかる。(50)のFQの場合は、おそらく何らかの音声的特徴

によって有標性が示されなくてはならないだろう。<sup>5</sup>

(50) a. 3個, 太郎はりんごを食べたよ。

b. 2人, オフィスに学生が来た。

(45) が述べるように、FQが先行詞よりも高い新情報性をもつとすれば、主題化できるのは当然先行詞だけである。(42)の構造の中で主題化しやすいのは[A]と[T]である。先に、[B]型の構文の主語先行詞がほとんど主題にならないという指摘をしたが、この構文ではむしろ場所句の方に主題性があるからだと考えられる。また、[T]型の構文においては、目的語が主題化する場合には、主語はむしろ省略されている例が多い。

(51) 水羊羹は、ふたつ食べるものではありません。(向田)

(52) 何かに興味を持ったら、関連の本は十冊は読むべきなんです。(立花)

(51)では否定の意味が、(52)では「べき」の意味が、明らかに焦点であるFQにかかっていることがわかる。

## 5. 結 び

日本語の数詞数量詞の遊離について、先行研究の多くが検討している例文は、実際の用例に比して短いものが多く、特に先行詞にかかる修飾句や先行詞とFQとの間に介在する要素についての実際の用法を正しく反映しているとは言えない。そのため、いずれの説も、それぞれに興味深い点に着目しながらも、必ずしも十分な説得力をもっているとは言えない。本論文では、基本的には高見の機能論的な立場を支持しながら、先行詞とFQとの間の相対的な新情報性という概念を考慮すべきであるという(45)のような特性に注目した。

(45) 遊離数量詞(FQ)は先行詞よりも新情報性が高い

筆者が検討した100の用例におけるFQの様々な特性は、(45)によって説明ができることを示した。ここで「より高い新情報性」とは何かということが当然問題になるが、日本語について一般に了解されていることとしては、動詞の近くに生起する要素はそうでない要素より新情

報性が高い、長い修飾語がついている要素はそうでない要素に比べて新情報性が高い、取り立て詞や限定表現を伴う要素はそうでない要素に比べて新情報性が高い、といったことが挙げられる。しかし、上記のどの要因がより優先的にはたらくのかということについて明らかにするためには、「より高い新情報性」という概念について、形式と意味の双方から更に丁寧な検討が必要であろう。

## 注

1. 例文 (7) そのものは、高見が挙げている文ではないが、高見の考え方に沿って例文をつくった。
2. 確かに高見の指摘の通り、道具・手段の「で」句については、次の (i) と (ii) どちらも同じように容認性が低い。
  - (i) \*太郎が折り紙で3枚、鶴を折った。
  - (ii) \*その折り紙は、太郎が鶴を折った。しかし、(i) の悪さに比べ、(ii) の悪さの程度はそこまでひどくないかもしれない。(iii) のように対比の意味が加わると、容認性が上るからである。
  - (iii) 赤い折り紙は、妹が鶴を折り、青い折り紙は、母が奴さんを折った。
3. Downing (1993) は、数詞数量詞の分布について日本語のテキスト分析を広範に行なっているが、その観察は筆者のデータが示す事実とかなりの程度まで一致している。Downing のデータでは、FQ 96 例のうち、他動詞の主語がわずかに4例であり、そのうち意志性を示す典型的な他動詞主語は1例だけだと報告している。また、「に」句が先行詞になっているものは、筆者のデータ同様たった1例だけである。
4. Downing は、名詞句の前に生起する数量詞 (Pre-N Q) と FQ の構文とを機能的な観点から比較しているが、FQ は、実に 87.5% が新情報の導入に用いられているのに対して、Pre-N Q は 43% が旧情報を表わしているという指摘をしている。筆者の観察でも、Pre-N Q のついた名詞句はそれ全体が定性を示しているものがかなり見られた。
5. この種の現象は、書きことばと話しことばとでかなり相違が出てくることが予想される。FQ そのものが、話しことばの方に多く表れるという指摘がされているが、いずれの言語においても、話しことばの場合には、音声的な方法によって語順の自由度が増すのがふつうである。データの容認性を判断する際には、その点を正しく考慮することが必要である。

## 参考文献

- Downing, Pamela. 1993. Pragmatic and semantic constraints on numeral quantifier position in Japanese. *Journal of Linguistics* 29: 65–93.
- Ishii, Yasuo. 1998. Floating Quantifiers in Japanese: NP Quantifiers, VP Quantifiers, or Both? 『先端的な言語理論の構築とその多角的な実証 (2-A)』神田外語大学. 149–171.
- 井上和子. 1978. 『日本語の文法規則』大修館書店.

羽 鳥 百合子

- 加藤鉦三. 2001. 「副詞的要素としての遊離数量詞」『人文科学論集』〈文化コミュニケーション学科編〉第35号, 信州大学.
- 神尾昭雄・高見健一. 1998. 『談話と情報構造』研究社.
- 三原健一. 1998. 「数量詞連結構文と「結果」の含意」『月刊言語』第27卷, 第6-8号.
- Miyagawa, Shigeru. 1989. *Structure and case marking in Japanese*. Academic Press.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』大修館書店.
- 高見健一. 1998. 「日本語の数量詞遊離について一機能論的分析」『月刊言語』第27卷, 第1-3号.

例文引用文献

- 堀江敏幸. 2001. 『熊の敷石』講談社.
- 向田邦子. 1981. 『父の詫び状』文春文庫.
- 向田邦子. 1982. 『眠る盃』講談社文庫.
- 立花 隆. 1995. 『ぼくはこんな本を読んできた』文芸春秋.